教育学研究科　国語教育専修，地方文学研究法

担当教員：福田安典

１．授業の概観

愛媛大学教育学部教育学研究科には、地方文学研究法という科目がある。当該科目は、愛媛の文学について、その概要や研究方法を実践的に学ぶ、もしくは実践して発信するということを目標としている。

現在、愛媛大学の教育学部が中心となって研究が推進されているのが、久米の書家、三輪田米山である。

当該講義も米山を扱うが、特に嘉永元年（一八四八）に米山が家督を継いでから明治四十一年（一九〇八） 八十八歳に至るまで書き続けた、総量三百册とも言われている『米山日記』を対象としている。『米山日記』原本は浅見海山先生及び愛媛大学教育学部書道研究室の多大な努力によって、大半を愛媛大学に所蔵されている。

この日記については、浅海蘇山の『米山　人と書』（昭和四十四年、墨美社）に簡にして要を得た解説がある。必要な箇所を引けば、「祭式のことはもちろん、自己の行動、所感、来信はもとより世相万般を克明に記している。特に子孫のために教えをもって自らの失敗体験を詳記」したものであり、「形式はきわめて丁寧」であるということになる。そのため幕末から明治にかけての世相史料としても活用も期待されている。例えば米山は芝居好きで、近郊で行われた芝居はほとんど見ているし、時にはその外題も書き留めている。

翻刻としてその浅海著と『松山市史料集』第八巻近世編（昭和五十九年）に抜粋が備わる。ただ、この両者は抜粋であるとともに、米山の字が難解であることもあって翻字のミスも少なくなく、両者を安易に使うことは出来ない。

例えば、安政の大地震によって道後の湯が止まったという有名な記事は、『松山市史料集』では、

郡中なと大破損、人死なと夥（おびただし）、又
今津なと大切さけ、尾垂（おたれ）のある家少き
なと、城下も人家破損多、道後の湯な　　と
止る話なと種々有之。
（安政元・十一月・六）

とあが、「今津（今出のこと）など大切さけ」では意味が通らない。この箇所は原文では、

郡中なと大破損、人死なと夥、又今津
なと大地さけ、尾たれの有家すくなき
なと、城下も人家破損多、道後の湯な　　と
とまるはなしなと種々有之。

とあって、「大地裂け」が正しく、原本に照らし合わせれば文意もすっきりしている。

教育学研究科の当該講義では、この翻刻された誤りの多い本文を、原本といちち照らし合わせるという地味で膨大な作業をここ３年続けてきている。

２．授業評価法

通常の授業評価方法は、その受講生の声をアンケートもしくはそれに準ずるものを以て評価法とすべきであるが、当該講義の評価方法は独特なものであるので、敢えてその概要を記しておく。

先述の通り、三輪田米山研究は、愛媛大学の文系の中では特筆すべき成果を挙げていると自負している。

成果公表として、図書館と連携して、ホームページ開設、書籍の出版などを続け、地域のみならず広くその成果を公表している。

そして、その米山研究の土台となっているのが当該科目である。すなわち、受講生は日々の作業、その積み重ね、レポートのすべてが一般に公開されることを前提とした完成度を意識しながら受講している。受講生のレポートをもとに米山没後百年を記念したシンポジウムや図書館展示が実現しているのである。

３．授業評価結果

その講義成果は各種マスコミ報道などによって明らかであるが、下記のホームページを参照していただきたい。そこに記される成果がそのまま受講学生の満足度と意欲の表れとなっている。

http://www.lib.ehime-u.ac.jp/BEIZAN/index.html

４．まとめ

大学に求められている授業評価は多岐に渡り、そして一概に決めつけられるものではないであろう。そのための試行錯誤はこれからも延々と続くと思われる。

ただ、その方法が講義アンケートのような一方的なもの、評価を点数や言語化したものでしか計ることが出来ないのは問題があろう。積極的にその学生の果たした研究や作業を世に問い、学術貢献に役立てるという方向性があってもよいのではないだろうかと思われる。

当レポートがその一助となれば幸いである。